

父 特集 親



慶應義塾大学  
文学部 教授

日本女子大学  
人間社会学部 准教授

**渡辺 秀樹**

**永井 暁子**

対談

父親像の広がりと  
これから

## 「父親が子どもと接する時間」の推移 ——意識の変化、実態の変化

渡辺 以前、日本、韓国、タイ、アメリカ、フランス、スウェーデンの6カ国において、家庭教育に関する比較調査をしました。0歳から12歳の子どもの持つ親、各国約1,000人（父母はほぼ半々）が対象です。この研究結果は、『平成16年度・17年度 家庭教育に関する国際比較調査報告書』（国立女性教育会館編 2006）で紹介していますが、父親が子どもに接している時間は、この10年間あまり変化していないんですね。10年前に調査したときも、ほぼ同じ結果でした。

しかも、日本と韓国は、父親が子どもに接する時間は増えるどころか減少しています。つまり、日本では20年以上にわたり、父親政策を続けていますが、その効果は現れていないんですね。少なくとも、この調査結果から言えるのは、父親が子どもと接する時間は増えていないのが実態です。

接する時間が減っているとはいえ、意識の面では多少の変化が見られます。「一緒にいる時間をもう少し増やしたい」と考える父親は多いようです。でも現実には、親子が一緒に生活する時間は増えていない。その原因に、労働時間の長さや経済状態などが考えられます。ここ10年は経済状態が悪く、多くの人が長時間労働を余儀なくされています。意識はあるものの、子どもと一緒にいる時間を増やすのが難しいのです。

これと比べ、父親が子どもと接する時間が長いのがスウェーデンです。この10年でさらに増加しています。

スウェーデンとフランスの母親は、日本や韓国の母親よりも子どもと一緒にいる時間が短いので、「父親が子どもと一緒にいる時間」との差が小さいです。

一方、日本や韓国では、「母親が子どもと一緒にいる時間」と「父親が子どもと一緒にいる時間」の差が非常に大きくなっています。子どもと一緒にいる時間に関しては、スウェーデン

やフランスは、「男女平等型」といえますね。

また、日本や韓国は、出産の立ち会いや育児などで仕事を休む男性の割合は少ないですね。スウェーデンなどでは、子どもを理由に長い休暇をとりますが、日本では育児休暇の期間も非常に短いんですね。

永井 結局、父親が子どもと接する時間については、意識の変化が多少みられるだけで、実態の変化はあまりないのが実情ですね。

『季刊 家計経済研究』の71号掲載の松田茂樹さんの論文（松田 2006）に、6歳以下の子どもがいるカップルに限定したNFRJ（全国家族調査）データの分析がありました。この論文も、男性の家事・育児参加に、あまり大きな変化はないとの結論でした。

ただし、妻がフルタイムで働いている「平等協業型」のカップルと、「平等協業型」を目指しているカップルでは、男性の家事・育児参加に変化がみられました。とはいえ、この2つのカップルは非常に数が少ないため、全体の平均値を押し上げる結果には至りません。

協業型カップルの子育ては、もしかしたら「平日は妻が頑張り、休日は夫が頑張り」形がとられているだけかもしれません。ですが、協業型カップルが増え、だんだん世間の目につくようにはなってきたのは事実でしょう。

「男性なのに、女性と同様に子育てするなんて」といった社会の偏見は、少しは減ってきていると思います。

渡辺 意識の面では、確実に変化が起きているようですね。「男性の育児参加が少ないのは問題だ」との考えが、どんどん広がっているのではないのでしょうか。

## 「親としての能力」を育むには ——政策・制度・学習環境の重要性

永井 先ほど、出産の立ち会いや、休暇日数の話が出ました。スウェーデンでは、ほかのヨーロッパの国と比べて、育児休暇をとる男性の割合も高いですし、取得する日数もはるかに多い



です。

しかし、スウェーデンの国内では、それでも男女の差が大きいとされ、もっと男女が同等に育児参加できるように制度が変更されているそうです。この話からも、日本とは意識も、政府の取り組みの方向性が全然違うことが明らかです。

**渡辺** スウェーデンでは政策の効果が非常に大きいですね。さらに、父親となる前から親としての準備学習が行われています。

一方、日本と韓国では、例えば、ベビーシッターの経験がある父親、あるいは育児に関する何らかの講座に出たことがある父親は非常に珍しい。どの国も、それらの経験がある父親はあまり多くはないのですが、日本と韓国は特に少ないと言えるでしょう。また、それらの経験がある母親も、日本と韓国では同様に少ないですね。

日本では、父親になる前に準備学習もないし、父親になってからのOJT(On-the-Job Training=職場内教育)としての参加学習もないのが現状です。実際に父親になってから子どもと接する時間が少ない。これでは「親としての能力」も、到底身に付きません。極端なことを言えば、いわゆる「モンスターペアレント」が生まれるのも

仕方がない環境で、親を責めてもどうしようもない。なぜなら準備学習の機会も、参加学習の機会もほとんどないのでから。

この問題については、一刻も早く策を講じる必要があるでしょうね。

## サポーターティブ・ディタッチメント ——親子関係の新しいモデル

**永井** 渡辺先生は、慶應義塾湘南藤沢の中・高等部の部長を務めていらっしゃいましたね。その経験から、父親について、どのようなことを感じられていますか。

**渡辺** 部長は4年間務めました。さまざまなタイプの父親がいました。中高生の保護者の方々によくお話したのが、サポーターティブ・ディタッチメント。子どもに密着せず、少し距離を置きつつも、しっかりサポートするスタイルについてです。

このサポーターティブ・ディタッチメントが最も大切なことだと思います。

**永井** 日本では、母親の多くは、子どもに干渉しすぎていますよね。

**渡辺** 何か少しでも問題事があると、すぐに母親がやってくるということもありました。でも、こうした親の言動が教育現場での子どもの教育の足を引っ張っているということもあるのではないのでしょうか。

サポーターティブ・ディタッチメントは、共働きの両親にとっては、極めて重要なキーワードになります。

**永井** サポーターティブ・ディタッチメントは、どちらかというと専門の母親に向けられた考え方だと思っていました。共働きの両親の場合には、どのように当てはまるのでしょうか。

**渡辺** この考え方は、デビッド・デモが提唱しました(Demo 1992)。1990年代になって、アメリカでは共働きの家庭がますます増えてきました。共働きの両親は、常に子どもと一緒にいること、つまり“アタッチメント”は無理です。限られた時間しか子どもと一緒にいられま

せん。デイ・ケア・センターやベビーシッターなどに子どもを預けることになり、その「親子で一緒にいられない時間」を、子どもにとって適切な育児資源につなげたい。親は少し離れてしっかりサポートするという、このサポーターティブ・ディタッチメントの考え方が、これからのアメリカの親子関係を考える上での1つのモデルになると論じたのです。

一方、子どもと常に一緒にいてサポートするのがサポーターティブ・アタッチメントです。これまでは、専業主婦が子どもと一緒にいてしっかりサポートしてきました。つまりサポーターティブ・アタッチメントです。しかし、共働きが増え、自立した女性が増えてくると、サポーターティブ・アタッチメントは難しいと、デイモは考えたのです。

90年代前半、私がこの概念を日本に紹介したとき、日本の親子論では、「一緒にいるか、いないか」ばかりが議論されていました。「サポートしているか、していないか」は、あまり問題にされませんでした。一緒にいたとしても、過保護であるとか、過干渉であるとか、子どもをスポイルする（だめにする）ことだってあります。それに、一緒にいないことで、放任であるとか、ネグレクトであるとか、別の問題が発生することは多々ありますね。

「一緒にいるか（アタッチメントか）」、「一緒にいないか（ディタッチメントか）」よりも、「サポートしているか（サポーターティブか）」、「サポートしていないか（ノンサポーターティブか）」にもっと注目すべきだと思ったわけです。

これを「サポーターティブ・アタッチメント」と「サポーターティブ・ディタッチメント」、「ノンサポーターティブ・アタッチメント」と「ノンサポーターティブ・ディタッチメント」と呼んでいます。

**永井** 「育児の時間」だけを問題にするのではなく、「育児の質」に注目することが大切なんです。

**渡辺** そうです。これも一般的にはあまり使われていない表現ですが、私は「クオリティ・ケア」と呼んでいます。「クオンティティ（量）」



ではなく、「クオリティ（質）」を考えましょうと。

## コ・ペアレンティング：分担から共同へ ——夫婦間コミュニケーションのある子育て

**渡辺** 近年、「週日は妻が、週末は夫が育児」といった育児のスタイルが多く見受けられます。でも、これは単なる“分担”です。

男女平等が叫ばれていますが、分担によって夫と妻の負担をフィフティ・フィフティにする子育て、つまり「今日は私、明日はあなた」の子育てが果たしているのでしょうか。

子育てには、分担による「パラレル・ペアレンティング」と、一緒にやる「コ・ペアレンティング」があります。“一緒に”子育てするスタイルを考えて欲しい。夫婦のコミュニケーションをとったうえでの子育てが望ましいのではないのでしょうか。

**永井** なるほど。耳が痛いと感じる方も、多いかもしれませんね。

**渡辺** 個人的経験でもうしわけありませんが、20年以上前、ハーバード大学に留学していたころの話ですが、毎朝、子どもをベビーシッターに預ける前に、公園に散歩に連れていっていま

した。留学期間が短く、時間を惜しんで勉強していましたから、同じく留学した妻とうまく分担しようと考えていたんです。

ある朝、「今日は僕が散歩に連れていくから、君は研究の準備をしておいてよ」と、妻に言ったことがあります。だけど妻は、「一緒に行く」と。そのときは「なんで一緒に来るの?」と思うんだけど、よく考えると「一緒に行く」ことが大事なこともかもしれないと思ったんです。

これまでは、男女平等がテーマになると、「分担」つまり「夫がどれだけ負担するか」が問題になっていたと思います。いままで夫が3割やっていたものが、4割、5割になればいい。そういった観点で議論されてきたと思います。

夫の育児参加が増えること、妻の負担が減ることは、すごく大切だと思いますが、それだけでいいのでしょうか。コミュニケーションなくして、夫婦間の分担だけで子育てをすると、果たして子どもにとってはどうなのでしょうね。パラレル・ペアレンティングの考え方では、「今日は夫、明日は妻。夫が何割負担していれば十分」で終わってしまいがちですね。

では、先ほどの6カ国の国際比較では、なぜ子どもと接する“時間”を調査しているのか。

時間が問題ではありませんが、ある程度の時間を共にしないと親としての経験を積むことができないからです。これでは親としての能力がつかない。何かあったときに、子どもに何と言えばいいのか、どうサポートすればいいのか、わからないわけです。

ですから、ある程度の「クオンティティ・ケア(量的なケア)」が保たれることを前提としたうえで、ただ時間が増えるだけで満足してはいけないと思うのです。

**永井** 2007年に勁草書房から刊行された『対等な夫婦は幸せか』(永井・松田編 2007)の中で、伝えたかったことがあるんです。

夫婦間においては、「対等」の均衡点を見い出すことが目標ではありません。なぜ家事をするのか、なぜ父親や夫が家事や育児をするのかについては、嫌なことを押しつけ合うことでは

なく、家族として、親子として、夫婦としての共有財産をつくっていくこと。そこに目標を見い出さないと、「対等」にだけこだわっても駄目ではないか、ということを書きたかったんです。

**渡辺** 一緒に料理したり、家事をしたり。夫婦や家族には、一緒に過ごす面白さがありますね。

**永井** 共同生活をすることで家族のメンバーとしての認知というか、共有の歴史をつくっていくことが大切なんじゃないかな。夫婦の幸せとは、対等な関係をつくることではありません。対等な関係は前提というか、手段ということなのです。

## 子どもがきっかけとなって広がる世界

**渡辺** 子育てをしていると、例えば、子どもを保育園に連れていくことによって、たくさんの親との交流が生まれます。親の職業も、公務員や自営業者などさまざま。考え方も人それぞれです。

父親にとっては、仕事では知り合えない人たちとつき合える。そこから世界が広がるんですよ。子どもをきっかけに、その地域の「住民」になるわけです。

**永井** それは母親も同じですよ。[〇〇ちゃんのお母さん]と呼ばれるようになりますから。子どもを介したネットワークも広がりますし、子どもを連れていたほうが、ご近所さんも声をかけやすい部分はあるでしょうね。実際に、自分も子どもができてから、知らない人を含めて、ずいぶんいろんな人に声をかけられるようになりました。

**渡辺** 子どもが小学生だったとき、サッカーのコーチをしていました。自分の子どもは毎日見ているから、変化がわからないんですけど、たまに子どもの友達の成長ぶりを見るとすごくうれしいですね。子育ては、そんな楽しさを知る機会も与えてくれます。

例えば、浅田次郎の小説『鉄道員(ぽっぽや)』(1997年)では、主人公は自分の子どもに何一

図表-1 将来子どもにして欲しくない家庭生活像（複数回答）

	日本	韓国	タイ	アメリカ	フランス	スウェーデン	(%)
同性愛カップルで生活する	76.0	96.5	87.8	65.2	36.5		32.2
一生独身でいる	69.9	90.5	77.4	65.5	53.9		86.1
子どもがいて離婚する	69.0	92.9	74.7	61.2	27.1		51.1
未婚で子どもを持つ	62.3	93.5	66.0	61.6	5.1		17.6
子どもを持たない	60.5	87.1	69.2	57.9	53.4		67.3
仕事の関係で夫婦が別居	47.7	75.1	66.1	60.8	22.2		35.9
婚姻届けをせずに同棲する	45.9	91.8	70.9	45.4	6.6		7.0
子どもを連れて再婚する	33.1	79.1	63.5	22.7	4.4		15.3
血縁関係のない子を育てる	26.0	64.6	69.5	6.2	4.6		3.4
配偶者の親との同居	14.8	43.4	35.4	50.4	42.7		68.9
自分との同居	14.6	41.8	23.0	49.6	41.8		74.2
1つもない	5.0	-	3.9	10.5	17.1		3.6
無回答	0.2	0.5	-	2.0	-		-

出典:『平成16年度・17年度 家庭教育に関する国際比較調査報告書』(独立行政法人 国立女性教育会館)

つ親らしいことはしていない。だけど幌舞駅で働き、地域の子どもの親をしたわけです。「俺、ずっと頑張ってこれたのは、おっちゃんも雨の日も雪の日も、幌舞のホームで俺らを送り迎えしてくれたからね。うまく言えんけど、俺、おっちゃんにがんばらしてもらったです」(浅田 1997: 31)と感謝するシーンがありましたね。

近年、父親は、するとしても自分の子どもの父親しかやらなくなりました。現実是非常に厳しいのですが、家族が社会に開いて、子どもが父親の世界を豊かにするきっかけになればいいですね。

### 家族規範と「子どもに望むこと」

渡辺 先ほどの6カ国の国際比較の中で、子ども

を通しての家族の文化や家族規範を調査しました。

単純集計ですが、「将来子どもにして欲しくない家庭生活像(図表-1)」の結果は、すごく興味深いんですよ。11項目の棒グラフが作り出す面積が家族規範の強さ、形が家族の文化を表しますが、これをみると6カ国の中で最も家族規範が強いのは韓国なんです。

韓国は、日本と同様、「同性愛カップルで生活する」がトップですが、かなりの項目で「して欲しくない」の回答が大半を占めています。法律婚をして、実子を育て、離婚をしなければ、韓国は非常に暮らしやすい社会なのかもしれませんね。しかし、いったんそこから外れると、非常に暮らしにくい。例えば、婚外子も韓国は少なく、「未婚で子どもを持つ」ことに対して、「して欲しくない」回答は、6カ国中トップで



す。

日本、韓国、タイの3カ国は、グラフの形が近く、家族の文化は似ているんだけど、家族規範の強度がちょっと違う。

一方、アメリカ、フランス、スウェーデンの3カ国は、非常に特徴的な家族の文化を持っています。

フランスは、「して欲しくない」の割合が高くても5割台で、5割を超えているのが2項目。この質問に関する限り、最も家族規範の弱い社会と言えます。いかにも個人主義の国らしい結果だと思えますが、このことから子どもには強く期待していないのが明らかですね。

**永井** フランスに次いで、社会規範の弱いスウェーデンも、グラフの形が面白いですね。

「一生独身でいる」ことに対して、「して欲しくない」が86.1%。「子どもを持たない」ことに対しても、「して欲しくない」が67.3%。事実婚であろうと、家族形成が強く望まれているようです。

**渡辺** 事実婚でも、同性愛でも、再婚でもいいから、カップルやパートナーという経験はして欲しい。実子でも、里子でも、養子でも、婚外子でもいいから、親子という経験をして欲しいと考えるのがスウェーデンの親ということにな

ります。

もう1つの特徴は、日本の親は、子どもが結婚しても一緒に生活してもいいと考えているようです。「パラサイト・シングル」ならぬ、「パラサイト・ダブル」でもいいよ、と。世代が連続的につながっているともいえます。ところが、スウェーデンの親は、子どもが結婚したら親と一緒にいるのはおかしい、親とは別々に暮らして欲しいと考えています。

つまり、世代で切れるか、世代で切れないかの違いですね。「世代連続的な家族文化」と、「世代分離的な家族文化」がはっきりしています。

## 「父親の頑張り方」について

**渡辺** 家族の文化や家族規範が、父親の行動に与える意味なども、考えてみる必要があると思います。ただ、コ・ペアレンティングを強調しすぎると、ある「意図せざる効果」が生まれる懸念があります。「一生懸命やるべきだ」との観念が働いてしまうのではないかと。

本田由紀さんも『「家庭教育」の隘路』（本田2008）の中で、あまりにも一生懸命やるのは問題があるのではと言っています。世代が分離しないで父親をすると、子どもの受験に一生懸命になったり、お金をかけたりすることになるんでしょうね。

**永井** 2000年に入って、「教育する父」をターゲットにした雑誌が創刊されたり、全国に「親父の会」が広まっていったりしていますが、最近の父親の「頑張り方」について、いかがお考えでしょうか。

**渡辺** 「子育てをしなさい」というと、つい父親は「じゃあ、頑張ればいいのか」と勘違いしがち。というのも、受験社会や学歴社会の価値を前提にしているから、塾へ行かせようとか、家庭教師をつけようとか、そういう発想になるんでしょうね。

**永井** 子育て雑誌における「教育する父」は、会社での頭の使い方をそのまま踏襲している気

がします。子育てと仕事では、頭の使い方が全く違うと思うのですが。

**渡辺** 違いますね。流れる時間が異なります。

**永井** 時間の使い方にしても、常に優先順位を決め、効率的に生産的に考える“仕事の発想”を、そのまま使って子育てするのはどうかと。もちろん、仕事のできる読者を引き込むための雑誌側の戦略かもしれませんが。

**渡辺** 父親たちの階層社会をそのまま反映しているところがありますね。

**永井** “仕事の発想”で子育てをしている父親がいれば、もったいないですね。確かに非効率的な時間の使い方かもしれませんが、子育ては仕事では得ることのできない経験をする絶好のチャンスです。

**渡辺** 仕事とは全く違う経験を積むことで、仕事に対して刺激になるのではないのでしょうか。

「家庭と仕事は対立する」といった前提を問いただすべきでしょう。家庭と仕事は両立する、あるいは相互に刺激するものです。

例えば、朝、子どもを保育園に送り届けます。すると子どもが、保育園の門の向こうから、「お父さん、お仕事頑張ってるね」って言ってくれる。「よし、今日も一日頑張ろう」って、私ならなりますけどね。

仕事と子育てでは、頭の使い方が全然違うんですよ。子育てするのが、気分転換になるし、刺激にもなります。そういう経験をして欲しいと思います。子育ては父親の「義務」ではなく、権利であって、それを奪われているようなものです。

一度、仕事とは違う頭の使い方、子育てをしてみると、その面白さがわかるはずですよ。もちろん、実際は大変なことも、たくさんあります。でも、いい経験であることは間違いないでしょうね。

## 欧米諸国における「子どもとのかかわり方」

**永井** 家族の脱制度化が進むアメリカやヨーロッパ



でも、ある程度、家族規範があります。父親が育児をする、家事をする時間も、かなり長いのです。

脱制度化していく中で、父親が家事をし、育児をすることがなぜ一般化していったのでしょうか。

**渡辺** 日本の公園で遊ぶ母親と子どもの多くは、いうなれば“母子カプセル”で遊んでいると言えます。

留学したころの経験ですが、アメリカの公園では、子どもは子ども同士で遊びます。1歳の子もいれば、2歳の子もいる。大人は、父親もいれば、母親もいれば、ベビーシッターもいる。そして、大人は大人同士で会話をします。

そこでは必ずしも、子どもが話題になるわけではありません。スポーツの話とか、文化の話で、大人たちは盛り上がります。

子育てによって、世界が広がるとは、こういう意味です。例えば公園で、子どもを見ながら、それとは別に自分の世界が広がる。

日本では、子どもを見るときには、話題が子どもに集中してしまふ。そこが、アメリカとの大きな違いではないでしょうか。

世代が分離しているか、つながっているかの違いとも言えます。子どものセットと大人のセ



ットなのか、親子のセットなのかという言い方もできるでしょう。父親が子どもにかかわるといっても、そのかかわり方は違ってきます。

## 稼得能力と、男性の育児参加

**渡辺** 日本の脱制度化について、考えてみましょう。

例えば、「婚外子でも、養子でもいい。とにかく子どもを育てる経験をしよう。それは自分の世界を広げるはずだ」といった考え方は、果たして日本で受け入れられるのでしょうか。

おそらく、難しいと思います。日本の婚外子割合は非常に低いですし、「できちゃった婚」がこれだけ多いのは、嫡出化するための1つの工夫だと思いますから。

韓国ほどではないけれども、嫡出的な親子関係を日本の社会が求めているとも言えますね。そういう中での親子であり、父親なんだと思います。

脱制度化に向かって、もう少し風通しをよくしていくというか、ゆったりと、子どもとのかかわりをつくり上げていけたらと思います。

**永井** 6カ国の国際比較調査では、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」といった家族役割では、日本は「どちらとも言えない」が43.5%を占めていますね。

しかし、「夫は家族のために収入を得る責任を持つべきだ」との質問には、日本と韓国は圧倒的に賛成意見が多い。だから、男性は働かなくてはならない。男性の家族役割を見直すことが課題になっています。

そんな社会では、女性が労働市場で低い評価をされる悪循環になりかねませんね。今後、女性が働くことがどこの国でも先行していき、男性の稼得役割、責任が減少していくことになると思います。ただ、そのためには、男女間の賃金格差が小さくなり、女性に稼得能力がつかないと。

松田茂樹さんの分析でも、妻の稼得能力が高い、あるいはそうなる可能性のあるカップルに

おいて、男性の育児参加が目立っています。

父親の育児参加を増やすためには、男性だけにあまり稼得責任を負わせないことが重要ではないでしょうか。

**渡辺** 稼得責任は、ポイントでしょうね。男女格差や賃金格差なども、父親の育児参加を左右する大きな要因だと思います。

ところで、私は大学で女子学生に、こう話しているんですよ。もしも男性が、あなたの、いわゆる女性的な部分に惹かれて、「家事や育児をしてくれそう、温かい家族をつくれそう」と考えてプロポーズしてきたら、あなたたちは性別分業型夫婦になりますよ。仕事を続けたいなら、男性があなたの仕事能力を含む総合的な能力を尊敬し、「この人の能力はすばらしい、仕事を応援していきたい」と思わせるような結婚を目指したらどうですか、と。

**永井** 「平等協業型」カップルを望む場合は重要ですよ。

## 変わり始めた「父親たちの意識」 ——理想の親子関係を築くには

**永井** スウェーデンの男性は、“父親業”をよくやっている、と言われます。しかし、彼らの父親は育児をしていたわけではなく、今の50歳ぐらいの人たちが父親のモデルを転換したんです。「なりたい父親になろうとしたら、いまのようになった」という話をよく聞きます。

スウェーデンでは、なぜ父親のモデルが転換し、“父親業”が盛んなのか。また、比較的、労働時間が長いアメリカで、父親が育児や子どもと過ごす時間を割くのはどうしてなのか。そう考えると、やはり離婚が増えたことが一因となっていると思います。

離婚すると、たいていは母子とセットで出ていきます。すると、残される父親は、子どもとの関係が途絶えるわけです。離婚後、子どもと会うことはできますが、その前にしっかり時間を費やしていないと親子関係ができないことを、しみじみ知っているんですね。

離婚して、再婚すればいいという考えではなく、スウェーデンやアメリカは、家族形成について強い意志を持っています。だから、“父親業”に熱心なんだと思います。

家族が崩壊するようになって、父親が「今、父親をすること」の重要性を、認識し始めたのではないかなと。

**渡辺** その通りだと思います。離婚が増え、父親は子どもとの絆を大切にするんですね。

**永井** 日本でも離婚率は上昇しています。今後さらに上昇する前に、父親には“父親業”の重要性を知って欲しいと思います。

日本では、「離婚は自分には無関係」と考えている人が多いですね。しかし、周りで離婚を見てきているでしょうし、子どもと別れて暮らす男性の切迫した実情なども知っていると思います。

意識の面では多少の変化が見られ、子どもと一緒にいる時間をもう少し増やしたいと考える父親が増えてきているのも、こうした危機感があるからかもしれませんね。

また、子どもが小さいときから子育てにかかわっていくことで、自分が描く父親像に結びつくことに、気づき始めているのでしょうかね。

## 父親像の変化した点、変化しない点

**永井** 実際に生活時間調査などを見てみると、子どもと一緒にいる時間は増えていませんが、10年前、20年前に比べて、赤ちゃんをだっこしたり、ベビーカーを押している父親は増えたような印象があります。子どもとスキンシップをする父親も、増えていませんか。育児時間には表れなくても、そういう変化はあると思います。

**渡辺** その流れは感じられます。小・中学校の授業参観にも、父親の姿が多くなっていますね。子どもの習い事などの付き添いにも、夫婦で参加する人もけっこういます。

しかし、父親と母親とでは、ほかの保護者とのコミュニケーションに大きな違いが見られます。母親は、すぐに母親同士で話が始められま

すが、父親は黙って子どもを見ているだけの人が多いですね。

**永井** 高齢者クラブなどでも、そういった男女の違いが見られるそうですよ。男性は黙々と将棋を指すだけ。ほとんどしゃべらないで帰ってしまうと、20年くらい前にも聞きました。それから、変わっていないんですね。

**渡辺** 若い人でも、父親同士だとあまり会話をしないようですね。

母親同士でしゃべるのは、おそらくほとんど子どものこと。とはいっても、本当の悩みなどは話さないのでしょうか。

父親同士で子どものことを話さないのは、なぜでしょうね。照れくさいのか、あるいは子どもたちの情報を持っていないのか。共通の話題が見つからず、お互いに黙っているケースも多いと思います。

## 父親に求められる“自然体”の育児参加

**永井** 「親父の会」といった形での、父親である男性の活動が盛んになってきましたね。全てとは言いませんが、特定の男性モデルをつくらせている会には、ある一定の機能があるのでしょうか。私の周囲には、男性らしさを訴える雰囲気のある「親父の会」に対しては、違和感を抱く男性もいます。

**渡辺** おそらく、そのようなタイプの「親父の会」なども、“自然体”ではなく、参加している人が“一生懸命”になりすぎてしまうということもあるんでしょうね。

例えば、子どもが小学校の先生から笛や定規を入れる袋を用意するように言われたとします。私なら、市販の袋を買って済ませようと考えます。しかし、父親の中には、裁縫が得意な人もいて、「なにがなんでも自分で裁縫する」と考える。

ただ、「親父の会」も、きっかけとしては悪くないと思います。いずれにせよ、そう“一生懸命”になりすぎず、“自然体”の父親が増えればな、と思います。

ところで、例えば、父子家庭と母子家庭が一緒にキャンプなどをした場合、たいてい文句を言いだすのは母子家庭の母親ですね。母子家庭の母親と父子家庭の父親が、性別分業になって、そこに軋轢が生まれるんです。

父子家庭のリーダーには、まじめな人が多いですね。「自分には組合の経験がある、組織することは得意だ」と、「父子家庭の会」をつくらしたりして。「親父の会」のようなイベント型も、きっかけとしてはいいと思いますが、それを“自然体”にしていくにはどうしたらいいかが難しいんですね。

**永井** スウェーデンに、主に育児休暇中の人が集まる施設があります。ただ空間を提供しているだけですが、そこには育休中の父親もやってきます。

あるとき、日本のテレビ局が、その施設に来ている父親を取り上げ、「一生懸命子育てする父親」として紹介していました。しかし、スウェーデンの人に実情を聞くと、そこに来る親は、ただ子どもを連れて来て、お茶を飲み、子どもとは無関係の雑談をするだけらしいんです。

**渡辺** 私が留学していたころも、アメリカの公園に来ている親は、自分の子どもにだけ注意しているわけではありませんでした。そこにいる子ども全員をウォッチしている。危ない場面では、自分の子どもであろうと、誰の子どもであろうと、同じように注意する。それでいて親は親同士で、好き勝手に雑談しているんです。

父親同士も、そんな感じですね。政治や趣味の話をして、子どもの話はほとんどしません。日本の父親も、それくらい“自然体”で育児参加できたらいいと思います。

## 変化する「父親としての役割」

### ——父性・権威は、望まれているか

**渡辺** こんなエピソードを聞いたんです。「奥さん、最近ご主人は、何をなさってますか？」「うちの主人、息子とキャッチボールするようになったんです」「それはまた、どうして？」

「もしこのまま離婚したら、子どもとの思い出が何もないから、あわてて“思い出づくり”を始めたんですよ」。

これは一例ですが、家族が危ういものになった昨今だからこそ、父親の意識にも変化が生じているみたいですね。

**永井** あるスウェーデン人が、「父親は、離婚した後のほうが、子どもを振り向かせようと必死になる」と話していました。なんとしても子どもとの関係をつくらねばと、危機感があるようです。昔よく叫ばれていた「父性の復権」は、影を潜めてきたのでしょうか。

また、父親の育児参加の奨励は昔からありますが、父親役割の中身については、世間の意識はどのように変わってきているんですかね。

**渡辺** 約20年前、父親の3カ国比較調査がおこなわれました。西ドイツ、アメリカ、日本を対象にした調査です（総務庁青少年対策本部1987）。

調査結果を見ると、「積極的に子供の相手をする父親」は、どこの国にもいるのがわかりました。そこで、その父親たちに、積極的に子供の相手をする理由を尋ねたんですね。

すると、西ドイツやアメリカの「積極的な父親」たちは、「仕事よりも子供の養育のほうが大切だと思うから」「子供のことを妻まかせにしたいいけないと思うから」といった回答を最も多く選択しました。つまり多元型生活、男女平等、そういった理由で、子育てに積極的というわけです。

一方、日本の「積極的な父親」たちは、「子どもにいろいろなことを教えたいから」と答える人が多かったんです（総務庁青少年対策本部1987: 40-43）。つまり、「構えている」んですよ。自分の生活や夫婦関係ではなく、子どもに対して「教えたいことがある」「教えなくては」などと気負ってしまう。もしもいま、同じような調査をしたら、日本の「積極的な父親」たちは、どう答えるのでしょうか。

**永井** 家事については、内田哲郎さんの論文（内田 2001）では、自分が家事をすることにつ

いてに夫婦間の「平等」を望むよりも、「妻が喜ぶから」との理由が多いですね。

育児に関しては、「子どもと楽しい時間を過ごしたい」とか、そういう回答になるんでしょうか。そうやって欲しいものですね。

**渡辺** 子どもとのかかわり方に「遊ぶ」と「世話をする」があれば、父親は「遊ぶ」のほうを選ぶんです。妻も夫には、そのくらいしか望んでいなかったりします。

しかし男性が「世話をする」ところまで参加できれば、それが理想だと思います。最初は一緒に遊ぶだけでも、だんだん世話をすることまで及んでいけば、すばらしい。そういったプロセスがあるべきだと思います。

**永井** また、“厳格な父親”であろうとする養育態度と、“暖かい父親”であろうとする養育態度。この二者択一では後者のほうが、直接的あるいは間接的に子どもとの関係を保持できるとの結果が多く見られるようです。もちろん、結果が出ているものと、出ていないものがありますけどね。

このデータをもとに考えると、父親は厳格な態度ではなく、母親のような暖かい態度で子どもの成長を見守るほうがいいのでしょうか。親子関係、あるいは夫婦関係には、そのほうがよい効果をもたらすと結論で、学術的な世界では一致しているような気がします。

**渡辺** 「父性の復権」は、あまり出てこないですね。韓国では、子どもとの接触時間が短いわりに、父親が教育に深くかかわっていますね。

**永井** そういう意味では、父性の意味合いは、日本の方が薄いでしょうね。日本の家族規範は、韓国に比べれば、きつくありませんから。

**渡辺** そうですね。

**永井** 日本は脱制度化しつつあると言えるのでしょうか。

**渡辺** これを脱制度化と呼ぶかどうかですが、少なくとも“権威型”ではないですね。

**永井** “権威型”の父親は、日本の社会ではあまり望まれていないのですか。

**渡辺** そうですね。父親の権威を裏づける資源

を、父親自身が持っていないということもあるかもしれません。子どものニーズを充足するのは母親だし、将来的に子どもに譲れる家産や家業もないし、権威の裏づけがないということではないでしょうか。

**永井** 唯一あるとすれば、学歴ですね。だから一部の「教育する父」は、受験や学歴などの価値観に走るのかもしれません。

## 教育の手配と階級の固定化

**渡辺** 最近では、「教育をする親」から「教育を手配する親」へと変化しているようです。ある韓国の研究者は、「家庭教育の外食化」と言っていましたね。親が教えるのではなく、塾、家庭教師、習い事、英会話などを手配するんです。

**永井** まるでモノを手配して、管理するみたいですね。

**渡辺** 学校教育も、そういった仕組みになりつつあるようです。教育の二重構造で。

例えば、そろそろ水泳の授業が始まるから、スイミングスクールに通って泳げるようにしておこうといった感じですね。それで学校は、「何メートル泳げましたね」と、測るだけ。これでは歯科健診と同じですよ。

**永井** そうなんです。私と同じ世代で10代の子どもを持つ友人と話したときのこと。私は北海道出身ですが、スキーと水泳が比較的得意だったので、その友人から「うちの子に、スキーと水泳を教えてよ」と言われたんですね。「学校で習うからいいじゃない」と言うと、「学校で習うから、その前にやらなきゃ」と言われて、びっくりしたんです。

学校で習う前に予習しておく風潮は、首都圏だけの話だと思っていたんですよ。北海道にまで、こんな波が来ているのかと驚きました。

**渡辺** 昨今はおそらく、どこもそうってしまったようです。「ゆとり教育」も同じですよ。たとえば、学校では「円周率は3」と教え、塾では「円周率は3.14」と教えるとか。

子どもを塾に通わすことができるのは、階層が高い家庭や、学歴が高い家庭。そうすると、子どもの学習は親次第になって、そこで差が出てきます。「階層の固定化」につながりますね。

そういう意味で、父親の学歴は非常に大きな要素になります。

## これからの子育てのあり方

### —男性の勇気と、社会の体制

永井 「できちゃった婚」「でき婚」などと呼ばれる結婚が、20代の結婚では、かなりの部分を占めています。その「できちゃった婚」も、「えっ、できちゃったの？ じゃあ仕方ないね」と結婚するのではなく、「子どもができたから、結婚へ移行しよう」といった感じになってきています。つまり、結婚しようと思う人の多くは、子どもを持ちたい欲求が高い人。パートナーだけが欲しいのではないんですね。

すでに結婚している男性も、子どもが欲しいとか、子どもとのかかわりを持ちたい人が結婚していて、昔のように、「社会的地位を整えるため」「家を継承するため」などといった理由で結婚する男性は少ないと思います。今では、子育てへの関心は、多くの既婚男性に共有されているのではないのでしょうか。

そうした中で、いま本当に望まれている父親像とは、「仕事と同じような頭の使い方を子どもに対してする父親」ではなく、また「母親とまったく同じようにケアにかかわる父親」でもなく、「子どもとの時間の中で、新しく頭を使う父親」だと思います。今はまだそうした父親像は一般的ではないかもしれませんが、「あと一押し」すれば、この「新しく頭を使う」父親像が一気に出てきそうです。

では、その「あと一押し」が何かというと、私の考えでは、「稼得責任」に対しての男性の「思い切り」ではないかと思います。「稼得責任」、つまり「稼ぐことへの責任」が、男性には非常に強いプレッシャーとしてのしかかっていると思います。「プレッシャーが強すぎて、結婚す

る気になれない」と話す男子学生も多いですよ。このプレッシャーのせいで、子育てへの関心をもつ父親たちも、スムーズに子育てに向かっていけなくなっているのではないのでしょうか。

この「稼得責任」のプレッシャーを自分だけで引き受けなければならないと思うのではなく、あえて妻と分かち合う勇気こそが、必要な「あと一押し」だと思います。「稼得責任」を、妻とざっくばらんに分かち合う勇気。これこそが、男性が子育てしたい欲求を満たすためのポイントだと思います。

そこで求められるのが、パートナーとのコミュニケーションだと思います。「稼ぐこと」へのこだわりを少しでも捨てることは、多くの男性にとってはプライドが邪魔してしまい、パートナーとそのような話をするのはなかなか難しいかもしれません。「こんなことを妻に話すのは、夫として間違っている」と考えてしまうのでしょうか。でも、そういったことは本来、結婚前から話し合うのが理想的です。

渡辺 先ほど、「世代が分離している、つながっている」と話しましたが、別の言い方をすると、「子どもを持つこと、育てること」について、もう少し気楽に考えられる社会をつくるべきです。つまり「家族の子ども」ではなく、「社会の子ども」として安心して信頼できる社会をつくるということです。

例えば、韓国、アメリカ、日本は、家計の中で「教育費」の占める割合が高い。しかし、ヨーロッパでは大学の学費が500ユーロ程度だったり、無料で学校へ行けたりします。

日本では、親の責任が問われすぎますね。すべて自分たちで面倒を見るという社会ですから、子どもを持つことのハードルが非常に高い。もう少し、子どもの面倒を社会でみるようにしていかないと。こうした、子どもを歓迎する状況をつくる中で、母親も父親も子育てにかかわっていくのがよいのではないのでしょうか。

言い換えれば、社会の子どもだから、社会が税金を使って学費を安くすることも考えて欲しい。



ドイツやスウェーデンの研究者は、「韓国や日本は、子どもの教育費が高すぎる。なぜ教育費を、親がもつ必要があるんだ」と言っていましたよ。私たち日本では、親が教育費を出すのは当たり前だと思い込んでいるだけなんです。

日本の社会のありようを、どこまで所与として考えるかが課題です。そのあたりの考え方を少し変えると、見えていなかったものが見えてくると思います。また子どもにも、もっと気楽にかかわれるようになると思います。

ただ現状としては、やはり夫婦で共同するしかない。父親と母親がスクラムを組み、共に家族をつくりあげていくことが重要なのでしょ

#### 文献

- 浅田次郎, 1997, 『鉄道員 (ぼっぼや)』集英社。  
内田哲郎, 2001, 「父親の育児？」『季刊家計経済研究』50: 32-38。  
国立女性教育会館編, 2006, 『平成16年度・17年度 家庭教育に関する国際比較調査報告書』。  
総務庁青少年対策本部, 1987, 『日本の父親と子供』。  
永井暁子・松田茂樹編, 2007, 『対等な夫婦は幸せか』勁草書房。  
本田由紀, 2008, 『「家庭教育」の隘路』勁草書房。  
松田茂樹, 2006, 「近年における父親の家事・育児参加の

水準と規定要因の変化』『季刊家計経済研究』71: 45-54。

Demo, D. H., 1992, “Parent-Child Relations: Assessing Recent Changes,” *Journal of Marriage and the Family*, 54: 104-117.

※この対談は、2008年10月29日に行われたものです。

わたなべ・ひでき 慶應義塾大学文学部 教授。主な著書・論文に『現代家族の構造と変容』（共編著、東京大学出版会、2004）、『現代日本の社会意識』（編著、慶應義塾大学出版会、2005）、“Changing Family Norms in Six Countries”（Paper presented at the annual meetings of the National Council on Family Relations, 2008）。家族社会学・教育社会学専攻。

ながい・あきこ 日本女子大学人間社会学部 准教授。主な著書・論文に「スウェーデンにおける男性の働き方と子育て」（『日本労働研究雑誌』535, 2005）、「女性の働き方と子育ての変化」（富田武他編『家族の変容とジェンダー』日本評論社、2006）、『対等な夫婦は幸せか』（共編著、勁草書房、2007）。家族社会学・家族福祉論専攻。